

関ヶ原の戦いにおける石田三成方軍勢の布陣位置についての新解釈

－なぜ大谷吉継だけが戦死したのか－

白 峰 旬

はじめに

これまで、関ヶ原の戦い⁽¹⁾における徳川家康方、石田三成方双方の軍勢の布陣については、明治26年（1893）刊行の参謀本部編纂『日本戦史 関原役（附表・附図）』⁽²⁾記載の布陣図が近年まで踏襲されてきた。しかし、拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実』⁽³⁾でその信憑性に疑義を呈したほか、直近では高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』⁽⁴⁾、乃至政彦『戦国の陣形』⁽⁵⁾によって、石田三成の笹尾山布陣が明確に否定されるなど、根本的に再検討が必要になってきている。

また、桐野作人『関ヶ原 島津退き口』⁽⁶⁾では、前掲・参謀本部編纂『日本戦史 関原役（附表・附図）』⁽⁷⁾記載の布陣図について、石田三成方軍勢が横一戦に布陣しているように描かれている点に疑義を呈している⁽⁸⁾。

そもそも、「現在の関ヶ原合戦の陣跡地の場所は、神谷道一氏著による『関原合戦図志』（明治25（1892）年5月）を参考に、岐阜県の役人たちが参加し、現地事情を様々に考慮しながら決めたそうです。」⁽⁹⁾という指摘があることから、現在の関ヶ原の戦いにおける諸将の陣跡地比定が慶長5年（1600）当時の一次史料によるものではなく、その信憑性という点で大いに疑義があるため、今後、再検討の余地が大幅にあることは自明である。

こうした点を考慮すると、関ヶ原の戦いにおける徳川家康方、石田三成方双方の軍勢の布陣については、ゼロベースで考え直す必要が出てきたことになる。よって、本稿では、石田三成方軍勢の布陣について若干の考察を加えることにしたい。

1. 島津家家臣史料における具体的記載

関ヶ原の戦いに関する一次史料（同時代史料）からは、徳川家康方、石田三成方双方の軍勢の布陣について考察することは史料の限界がある。よって、本稿では、二次史料（後世の編纂史料）ではあるが、関ヶ原の戦いに参戦した島津家家臣の史料（『旧記雑録後編三』記載）⁽¹⁰⁾（以下、島津家家臣史料と略称する）を検討することにより、石田三成方の軍勢の布陣について検討したい。

この関ヶ原の戦いに参戦した島津家家臣史料については、すでに前掲・桐野作人『関ヶ原 島津

退き口』⁽¹¹⁾において網羅的かつ詳細に紹介・検討され考察が加えられているので、いまさら筆者(白峰)が検討するのは屋上屋を重ねることになるかもしれないが、本稿では、筆者(白峰)なりの視点から考察を加えたい。

また、前掲・高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』⁽¹²⁾でも島津家家臣史料などをもとに石田三成方軍勢の布陣を検討しているが、高橋氏の見解については、筆者(白峰)としては明確に否定しているので⁽¹³⁾、高橋氏とは異なる視点から考察したい。なお、関ヶ原の戦いについて島津家家臣史料の詳細な検討については、別稿を用意する予定である。

島津家家臣史料において、石田三成方軍勢の布陣が記されている箇所を中心に現代語訳してそれぞれ示すと以下のようなになる⁽¹⁴⁾。

■『山田晏齋覚書』

No. 1311 (625頁)⁽¹⁵⁾

9月15日、開戦前(「敵合前」)に亀井茲矩から、敵が来たので、鉄炮衆を加勢してほしいとのことだったので、濱の市衆を遣わすべき旨、(島津豊久の)御意にて城(堀カ)^(ママ)井三郎兵衛殿(以下、人名は省略)を遣わした。その衆が亀井茲矩の備^{そなえ}に到着する途中と思われる時分に、早くも味方勢は崩れた。以後、聞いたところでは、亀井茲矩は野心(謀反をおこそうとする心)があったということである。

■『神戸五兵衛覚書』

No. 1330 (638頁)

(9月15日)夜が明けると、東国衆は大谷吉継の陣に攻めかかり、6~7度の合戦があったところに、上の山より小早川秀秋が白旗を指させて横入りして、大谷吉継の人数(軍勢)は一人も残らず討ち取られた。宇喜多秀家の陣へは(家康方の)新手の大将が攻めかかって追い崩し、この方の陣(島津義弘の陣)へ攻めかかってきた。東は別の手の(家康方の)大将が攻めかかって石田三成の陣を追い崩したので、この方の陣(島津義弘の陣)へ攻めかかってきた。

■『神戸久五郎覚書』

No. 1332 (639頁)

(東国衆は)岡山より関ヶ原へ来た。(家康方の軍勢は)まず一番に大谷吉継の陣に攻めかかり、大谷吉継も応戦して6~7度の合戦をしていたところに、上の山より小早川秀秋が逆心をして白旗を指させて横入りをしたので、大谷吉継の人数(軍勢)は一人も残らず討ち取られた。宇喜多秀家の陣へは(家康方の)別の大将が攻めかかって一戦をしたが(島津義弘の陣の)前に岡があって、この方の陣(島津義弘の陣)よりは(戦いの様子が)見えなかった。宇喜多秀家の陣は崩れて(「山」は「崩」の誤記か?)、その敵がこの方の陣(島津義弘の陣)へ攻めかかってきた。東は石田三成の陣に(敵の)猛勢が攻めかかって一戦をして、石田三成の陣も崩れた。その敵もこの方の陣(島津義弘の陣)へ攻めかかってきた。この方の陣(島津義弘の陣)は二番備であった。

■某覚書

No. 1340（643頁）

翌（9月）15日巳の刻（午前10時頃）頃、朝霧の絶え間より、のぼりとおぼしき物が見えた旨を言ったので、各自が見たところ、思った通り、関東の大勢数万騎が見えた。この軍勢が次第に攻めて近付き、島津義弘の備より東方にある宇喜多秀家の備に（家康方の軍勢が）押しかけてきて（おそいかかってきて）合戦になり、宇喜多秀家の備は敗れた。（これらの）敗軍の士卒がこの方の備（島津義弘の備）の方へ崩れかかるように見えた。島津義弘の御意として「敗軍の軍勢がこの方の備に崩れかかったならば、味方の軍勢であっても打ち捨てるべし」とのことだったので、各自が兜を傾け、鎧を膝に乗せていたため、（こちらに来ずに）この陣（島津義弘の陣）と池との間に逃げていった。そして、この関東勢がこの方の陣（島津義弘の陣）へ攻めかかってくるように見えたが、そうではなく、大谷吉継（の陣）へ声を発して攻めかかり、大谷吉継の軍勢を一町（約109m）ばかり突きさけたところ、また大谷吉継が関東勢を一町あとへ突き戻し、互いに二三次もみ合っていた時、大谷吉継陣の備のうしろの岡に備があった小早川秀秋が返り忠（裏切り）によって岡から真下に攻めおろし、大谷吉継の軍勢を残らず討ち取った。

■『長野勘左衛門由来書覚書抜』

No. 1402（687頁）

石田三成・小西行長の人数（軍勢）が家康方の軍勢に向き合って、鉄炮の合戦をして、それから太刀打ちになり、激しい合戦になった時（後略）

■『慶長五年於関ヶ原御合戦之砌、木脇休作殿働之次第、神戸五兵衛覚書写』

No. 1404（690頁）

（東国衆が）大谷吉継の陣に攻めかかった。この方（島津義弘）の御陣の前は宇喜多秀家（の陣場であり）、東は石田殿が受け取った陣場であった。この方（島津義弘）は二番備であったところ、大谷吉継は戦死し、宇喜多秀家、石田三成（の陣場は敵に）追い崩され、この方（島津家）の御陣に（敵の）猛勢が攻めかかってきた時（後略）

■『黒木左近・平山九郎左衛門覚書』関ヶ原御一戦之大抵

No. 1405（691頁）

夜明け前に関ヶ原へ到着し、備場を見合わせたところ、石田三成の備があった。それ（石田三成の備）より右の方へ一丁半程（約163.5m）間があって、この方の軍衆（島津豊久の軍勢）は夜明けに備をなした。島津豊久は先備であった。

■『黒木左近・平山九郎左衛門覚書』関ヶ原御一戦之大抵

No. 1405（692頁）

一戦前（石田三成方軍勢の主力本隊と家康方軍勢が戦う前）に、大谷吉継の陣を小早川秀秋が攻め破った時に、この方（島津豊久）の備の近辺を馬乗二騎が通った。（中略）その後、出会ったところでは、（小早川秀秋が）大谷吉継の陣を攻め取ったことを、家康方の軍勢へ注進する使者であったのであろう、とのとのことである。

■『黒木左近・平山九郎左衛門覚書』関ヶ原御一戦之大抵

No. 1405 (693頁)

この方(黒木左近兵衛)の備は二備であった。島津豊久は先備である。右備には山田有栄がいた。自分(黒木左近兵衛)は(島津豊久に)付いていた。

■『黒木左近・平山九郎左衛門覚書』関ヶ原御一戦之大抵

No. 1405 (696頁)

合戦の配りは、一番(マ)は石田三成、二番は島津豊久、三番は宇喜多秀家、その続きは島津義弘であり、そのほかの大名衆は方々に陣取りをした。(合戦が始まって)石田三成は一時(わずかな時間)ももちこたえられず、島津豊久の陣場へ崩れかかったところ、島津豊久は少しもちこたえた。(中略)宇喜多秀家の陣取りと島津義弘の陣の間に池があり、宇喜多秀家の人数(軍勢)は皆々この池に逃げ入り、この方(島津義弘)の陣場に(も)乱入した。

■『井上主膳覚書』

No. 1407 (703～704頁)

島津豊久は(島津義弘とは)別(の)備であった。(中略)敵方より馬を700ばかり両度(2回)入れてきた。二度目の戦いは大乱(戦)になり、薩摩衆は大方後ろの堀に逃げこんだ。

2. 島津家家臣史料からわかること

以上の島津家家臣史料からわかる石田三成方軍勢の布陣の位置関係の記載をまとめると、以下のようになる。

- (1) 宇喜多秀家の備は島津義弘の備の東方にある (No. 1340)。
- (2) 石田三成・小西行長の軍勢が家康方の軍勢に向き合った (No. 1402) ということは、石田三成と小西行長の備は先備(先鋒)であったことになる。
- (3) 島津義弘の陣は二番備であった (No. 1332、1404)。
- (4) 島津義弘の陣の前は宇喜多秀家の陣であり、東は石田三成の陣があった。そして、島津義弘の陣は二番備であった (No. 1404)。
- (5) 石田三成の備より右の方へ一丁半程(約163.5m)間があつて、島津豊久の備があり、島津豊久は先備であった (No. 1405)。
- (6) 亀井茲矩から島津豊久に対して、鉄砲衆を加勢してほしいとの要請があり、島津豊久は鉄砲衆を遣わした。しかし、亀井茲矩は途中から寝返った (No. 1311)。
- (7) 大谷吉継の陣を小早川秀秋が攻め破った時に、島津豊久の備の近辺を馬乗二騎が通った。この馬乗二騎は、小早川秀秋が大谷吉継の陣を攻め取ったことを、家康方の軍勢へ注進する使者であった (No. 1405)。
- (8) 島津豊久の備と島津義弘の備は別々の備であった (No. 1407)。

- (9) 先備であった島津豊久の備の中において、黒木左近兵衛は二備に属しており、山田有栄は右備であった（No. 1405）。
- (10) 布陣は、一番は石田三成、二番は島津豊久、三番は宇喜多秀家、その続きは島津義弘でありそのほかの大名衆は方々に陣取りをした（No. 1405）。
- (11) 宇喜多秀家の陣と島津義弘の陣の間に岡があり、島津義弘の陣からは、宇喜多秀家の陣における戦いの様子が見えなかった（No. 1332）。
- (12) 宇喜多秀家の陣と島津義弘の陣の間に池があり、宇喜多秀家の軍勢はこの池に逃げ込んだ（No. 1405）。
- (13) 島津義弘の陣の後方には堀があった（No. 1407）。

これらのまとめ（上記（1）～（13））を見ると、すべての位置関係の記載が一致しているわけではないことがわかる。例えば、上記（10）の記載は、島津豊久が先備であったとする上記（5）や、島津義弘は二番備であったとする上記（3）、（4）の記載と矛盾する。よって、上記（10）の記載は検討対象から除外する。

上記（10）以外の記載を総合して考えると、以下（a）～（g）のように整理できる。

- (a) 先備は宇喜多秀家、石田三成、島津豊久であり、それらの陣（備）の向きは東方に向いていた。なお、小西行長も先備であった可能性があるが、No. 1402以外は小西行長に関する記載はないので確定はできない。
- (b) 島津豊久の陣の近距離（加勢をすぐに送れるくらいの距離）の位置に亀井茲矩の陣があった。
- (c) 小早川秀秋が家康方の軍勢に出した使者（馬乗二騎）が島津豊久の陣の近辺を突っ切ったということは、島津豊久の陣は小早川秀秋の陣と家康方軍勢の間、或いは、その近辺の至近距離にあったことになる。よって、島津豊久の陣は最前線にあったことになる。
- (d) 島津義弘は二番備であり、宇喜多秀家の陣の後方（西方）にあった。
- (e) 島津義弘の陣の東方に石田三成の陣があったので、陣の向き（＝東方）からすると、島津義弘の陣の斜め前方に石田三成の陣があったことになる。
- (f) 大谷吉継の陣は、石田三成方軍勢の主力本隊（石田三成、宇喜多秀家、小西行長、島津義弘、島津豊久など）の近くに布陣した、という記載はないので、石田三成方軍勢の主力本隊の布陣位置からは距離的に離れていたことがわかる。
- (g) 宇喜多秀家の陣と島津義弘の陣の間には岡と池があり、島津義弘の陣の後方には堀があった。ただし、この岡、池、堀が現在地でどこに比定できるのか今後検討する必要がある。池と堀については、慶長5年当時は池や堀であっても、現在では池や堀でない可能性も含めて検討すべきであろう。

No. 1330の記載によれば、家康方の先手の軍勢は、宇喜多秀家と石田三成の陣（備）を突き崩してから、島津義弘の陣（備）へ攻めかかってきた、とあるので、宇喜多秀家、石田三成、島津義弘の各陣は距離的に離れておらず、ある程度密集して布陣していたと考えられる。そのため、ドミノ

倒しのように、次々と石田三成方の諸将の軍勢の陣が崩れていったのであろう。

時系列で考えると、No. 1330、1332の記載によれば、9月15日早朝、真っ先に大谷吉継の陣が家康方軍勢の攻撃を受け激戦が展開されたが、裏切った小早川秀秋の攻撃を受けて大谷吉継の陣は壊滅した。No. 1340の記載では、大谷吉継が攻撃されたのは、宇喜多秀家が攻撃されたあととしているが、No. 1404では、大谷吉継が戦死したあと、宇喜多秀家、石田三成の陣が追い崩された、としているほか、No. 1405では、一戦前(石田三成方軍勢の主力本隊と家康方軍勢が戦う前)に、大谷吉継の陣を小早川秀秋が攻め破った、としているので、時系列としてはNo. 1330、1332の記載の方が信憑性がある。なお、No. 1340の記載で注目されるのは、大谷吉継の陣(備)のうしろの岡に小早川秀秋の陣(備)があった、としている点である⁽¹⁶⁾。

このことは、開戦時には小早川秀秋が松尾山の山上(松尾山城)に布陣していたのではなく、松尾山の前に位置する小高い岡(通説の布陣図で脇坂安治などの諸将が布陣したとされている位置〔現岐阜県不破郡関ヶ原町藤下〕)まで移動して布陣した可能性を示している。小早川秀秋が松尾山の山上(松尾山城)に布陣して動かなかった場合は周囲の戦況の変化が確認できないので、松尾山よりさらに前方(東方)に進出(移動)して布陣し、戦況の変化を十分確認したうえで、大谷吉継を背後から攻撃したと考えた方が整合的に理解できる。

そもそも、開戦時に小早川秀秋が松尾山に布陣していたとする一次史料は管見の限りでは確認できないので、開戦時における小早川秀秋の布陣位置を松尾山に固定して考える必要はない。

従来の通説による布陣図をもとに考えた場合、ともすれば、小早川秀秋や大谷吉継の布陣位置を固定して考えがちであったが(通説の布陣図では、小早川秀秋は松尾山、大谷吉継は山中に布陣していた、とする)、戦況は常に変化するものであるから、戦況の変化に合わせて適宜移動したと想定すべきであろう。

このことは、小早川秀秋、大谷吉継に限らず、他の諸将の場合も同様である。福田誠氏が「戦国時代の合戦は近現代戦のごとく面を制するように戦うのではなく、海戦のように敵部隊の捕捉撃滅を狙って城から出撃し、決戦に持ち込むべく移動する、というものであった。(中略)両軍とも決戦場を想定して出陣し、その予想地点で遭遇すれば合戦となる。」⁽¹⁷⁾と指摘しているように、諸将の部隊が「敵部隊の捕捉撃滅を狙って」、「決戦に持ち込むべく移動する」という当時の軍事的セオリーを考慮すべきであろう。

大谷吉継の陣が家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢に挟撃された、ということは、大谷吉継が最前線のかかなり突出した位置、つまり、北国から着陣した当初の山中エリア(現岐阜県不破郡関ヶ原町山中)から東方(前方)に移動し、関ヶ原エリアに進出して布陣していたことを示している。通説による従来の解釈のように、大谷吉継は通説の布陣図で示されている松尾山の麓に近い位置(最前線からはかなり離れた後方の位置)に開戦時までずっととどまって動かずに布陣していたのではなく、石田三成方軍勢の主力本隊(石田三成、宇喜多秀家、小西行長、島津豊久、島津義弘など)が大垣城を出て、山中エリアに着陣する前に合流せずに最前戦へ進出し、それと同時に小早川秀秋も松尾山

の山上（松尾山城）から松尾山の前に位置する関ヶ原エリアの小高い岡（通説の布陣図で脇坂安治などの諸将が布陣したとされている位置）まで移動して（つまり、関ヶ原エリアまで移動して）布陣した可能性が高い。この時点では、小早川秀秋が裏切る前だったので、大谷吉継は背後の岡に布陣した小早川秀秋を味方と考え警戒していなかったと思われる。

よって、開戦時（9月15日早朝）には大谷吉継は山中エリアに布陣した石田三成方軍勢の主力本隊（石田三成、宇喜多秀家、小西行長、島津豊久、島津義弘など）とは離れた、より東方（前方）の突出した位置に布陣しており、その布陣位置は家康方軍勢に最も近い位置（最前線）にあったということになる。

石田三成方の軍勢の有力部将の中で戦死したのが大谷吉継だけであった、というのは、最初の激戦で家康方軍勢の集中攻撃を受けたことと、裏切った小早川秀秋の軍勢に背後から攻撃を受けたことによるものと考えられる（つまり、完全に挟撃されて逃げ場がなかった）。このように考えると、石田三成方の軍勢の有力部将の中で戦死したのが大谷吉継だけであった理由がよく理解できる。なお、石田三成方の部将クラスでは、島津豊久も戦死したが時系列で考えると島津隊の撤退の過程で戦死したので、大谷吉継の戦死とは状況が異なる。

おわりに

前掲・高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』⁽¹⁸⁾、前掲・乃至政彦『戦国の陣形』⁽¹⁹⁾では、上述のように、これまで通説で述べられてきた石田三成の笹尾山布陣を明確に否定し、さらに石田三成方の軍勢が鶴翼の陣を敷いたとする通説の見解をも否定している。島津家家臣史料には石田三成が笹尾山に布陣した、という記載は全くないので、この点は、高橋氏と乃至氏の見解を裏付けるものと言える。

本稿で考察したように、島津家家臣史料をもとに考えると、石田三成方軍勢の主力本隊（石田三成、宇喜多秀家、小西行長、島津豊久、島津義弘など）は、ある程度密集して布陣していたと考えられ、その意味では通説の布陣図に見られるような鶴翼の陣（幅広いエリアに布陣したイメージ）とは真逆な布陣の仕方だったことになる。石田三成方軍勢の主力本隊が布陣した場所は、上述のように、関ヶ原ではなく山中であったので、山中エリア（つまり狭いエリア）に、ある程度密集して布陣したことになる。このことが、石田三成方軍勢の主力本隊がドミノ倒しのように次々と各陣を突き崩されて即時に敗北した原因と考えられる。

No. 1332の記載などからもわかるように、最初から石田三成方軍勢の主力本隊は防戦にまわっており、家康方軍勢が先制攻撃をかけたことがわかる。家康方軍勢について、No. 1332、1404に「猛勢」、No. 1340に「関東の大勢数万騎」とあることから、通説とは異なり、家康方軍勢と石田三成方軍勢とは開戦の時点でかなりの兵力差があった、と考えられる。このことも、石田三成方の軍勢が即時に敗北した原因の一つであった、と思われる。

こうした戦いの構図を想起すると、前掲・乃至政彦『戦国の陣形』⁽²⁰⁾において、石田三成方の軍勢が家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢によって挟撃された、という想定をシミュレートしていることについては、上述のように大谷隊の壊滅のプロセスにおいて最も顕著にあらわれている。一方で島津家家臣史料の記載では、石田三成方軍勢の主力本隊が小早川秀秋の軍勢による攻撃を受けた、とする記載はないことから、石田三成方軍勢の主力本隊は、家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢によって挟撃が成立する以前の段階で、家康方軍勢の先制攻撃のみによって即時に壊滅した、ととらえた方がよかろう。或いは、小早川秀秋の布陣位置が石田三成方軍勢の主力本隊から距離的に離れていて、家康方軍勢との挟撃が成立するような位置関係にはなかった可能性も考えられる。

No. 1405では、「(合戦が始まって)石田三成は一時(わずかな時間)ももちこたえられず、島津豊久の陣場へ崩れかかったところ」としているが、この場合の「一時」は「一時=一刻=現在の約2時間」⁽²¹⁾と考えるのではなく、「一時=わずかな時間」⁽²²⁾と考えるべきであろう。

山中エリアに布陣した石田三成方軍勢の主力本隊が即時に敗北したことは、吉川広家自筆書状案⁽²³⁾に「山中のことは即時に乗り崩され、ことごとく討ち果たされた」、「家康(方の軍勢)がすぐに山中へ押し寄せて合戦に及び、即時に討ち果たした」と記されていることから明らかである。また、本戦における戦闘に参戦(生駒利豊は福島正則麾下で尾張衆として宇喜多秀家の軍勢と戦った)した生駒利豊の書状⁽²⁴⁾によれば、戦い開始後、すぐに追撃戦に移っていることがわかる。

吉川広家自筆書状案⁽²⁵⁾によれば、家康方軍勢の先手は福島正則と黒田長政であり、前掲・生駒利豊書状⁽²⁶⁾によれば、福島正則は宇喜多秀家と戦っている。これらの点を勘案すると、No. 1330に記されている、宇喜多秀家の陣に攻めかかった「新手の大將」とは福島正則であり、石田三成の陣に攻めかかった「別の手の大將」とは黒田長政であったことがわかる。

なお、前掲・乃至政彦『戦国の陣形』⁽²⁷⁾では、大谷隊が石田三成方軍勢の主力と合流したが家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢(朽木元綱・小川祐忠・脇坂安治の軍勢も含む)によって挟撃された、という見解(シミュレーション)を提示しているが、上述したような戦況の推移(最前線に突出した大谷吉継隊が、真っ先に家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢によって挟撃された)からすると、大谷隊は石田三成方軍勢の主力本隊と合流せずに先を行き過ぎて(つまり、石田三成方軍勢の主力本隊から離れて東方に進出しすぎて)、その結果、最初に敵(家康方軍勢)の攻撃を受けて壊滅した、と理解した方が整合性が取れるように考えられる(以上の検討結果を図示したものが図1である)。

以上の諸点を考慮すると、石田三成方軍勢の敗北過程は、時系列として、9月15日早朝⁽²⁸⁾、最前線で家康方軍勢が大谷吉継隊を攻撃し、家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢の挟撃によって大谷吉継隊が壊滅した第一段階(この時の戦場は関ヶ原エリア)、その後、同日巳の刻(午前10時頃)頃⁽²⁹⁾、家康方軍勢の主力が山中エリアに布陣した石田三成方軍勢の主力本隊を正面から先制攻撃して即時に追い崩した第二段階(この時の戦場は山中エリア)というように考えられる。

このように考えると、戦場は「関ヶ原」と「山中」の2ヶ所であり、戦場の位置比定としてはどちらも正しい、ということになる。

なお、上述のように小早川秀秋が関ヶ原エリアで戦ったことについては、「(慶長5年)9月19日付林正利宛小早川秀秋書状(感状)」⁽³⁰⁾に「この度、関ヶ原表における比類なき働き」(下線引用者)と記されている点が、その証左となる⁽³¹⁾。

また、「(慶長5年)10月7日付本多正純宛池田輝政書状写」⁽³²⁾に「9月14日の夜に大谷吉継が陣取りへ着いたところ、翌15日の未明に御一戦を(家康が)仰せ付けられて(後略)」と記されているので、9月14日夜の大谷吉継の着陣と、家康が翌15日の未明に一戦するように命じたことが直結していたことがわかる。この池田輝政書状には、大谷吉継が着陣した場所は記されていないが、9月14日夜の大谷吉継の着陣に対して、家康が翌15日未明の出陣を即決したことは、大谷吉継が家康方軍勢を挑発するように、家康が本陣を置いていた赤坂(岡山の本陣)から近い距離にある関ヶ原エリアに布陣したことを意味すると推測できる。

本稿で指摘した石田三成方軍勢の敗北過程については、今後さらに詳細な論証が必要なことは言うまでもなく、その考察については他日を期したい。

[註]

(1)「関ヶ原の戦い」という呼称については、現在一般的に用いられているが、この場合の「関ヶ原の戦い」が9月15日の関ヶ原の戦い(本戦)を指す場合と、9月15日の関ヶ原の戦い(本戦)に至る一連の戦い、或いは、各地域でおこった支戦の総称を指す場合がある。後者については、例えば、「九州の関ヶ原」とか「東北の関ヶ原」という使用例があるが、厳密に考えると、ミクロにとらえる前者とマクロにとらえる後者では呼称を分けた方がよいのは当然である。

研究史的に見ると、明治25年(1892)刊行の神谷道一『関原合戦図志』(著作者は神谷道一、発行者は小林新兵衛)では、「関ヶ原ノ役」、「関ヶ原合戦」、「関ヶ原戦争」(付図)という呼称が用いられ、これらはミクロにとらえる前者の呼称のように思われる。明治26年(1893)刊行の参謀本部編纂『日本戦史 関原役』(著作権所有参謀本部、元眞社発行)では、ミクロにとらえる前者の呼称を「本戦」とし、各地域での戦いを「本戦前後東西各地ノ諸戦」としている。そして「凡例」では、慶長5年の全国各地の戦いについて「庚子役ト題スヘキ」であるが、「関ヶ原ノ名、已ニ人口ニ膾炙シ且其主タル所ナルヲ以テ」、「此」(=関ヶ原)「ヲ取レリ」としている。そのため、本のタイトルでは「関原役」となったのであろう。明治時代に作成されたと思われる東京大学史料編纂所蔵の『史料稿本』の「1600、18-2-2、76」は「慶長五年庚子役文書纂 九月上 五」、「1600、18-2-2、77」は「慶長五年庚子役文書纂 九月下 六」というタイトルが付けられているので、「慶長五年庚子役」という呼称を用いていたことになる。これはマクロにとらえる後者の呼称と考えられる。大正9年(1920)刊行の『山形縣史』第一(山形県)の例言では「慶長庚子ノ役」と呼称している。これもマクロにとらえる後者の呼称と考えられる。昭和10年(1935)刊行の徳富蘇峰『近世日本国民史 家康時代上巻 関原役』(民友社)では、ミクロにとらえる前者を「関原本戦」、マクロにとらえる後者を「関原役」と呼称している。

このように、明治時代、大正時代、昭和時代(戦前)では、ミクロにとらえる前者とマクロにとらえる

後者を区別して呼称しようとした意識が見られる。そして、マクロにとらえる後者の呼称では、「庚子」という慶長5年の干支を呼称に含めている事例も認められる。これは、古代の壬申じんしんの乱(672年)、近代の戊辰戦争ぼしん(1869～69)と同様に、戦乱がおこった年の干支を呼称に入れた、ということなのであろう。

筆者(白峰)は、すでに拙著『新「関ヶ原合戦」論—定説を覆す史上最大の戦いの真実』(新人物往来社、2011年)において、慶長5年の長期にわたる争乱状態を「庚子争乱こうしそうらん」と名付けてもよからう、と指摘した。

この慶長5年の日本国内の争乱状態について、同時代人の認識としては、『北野社家日記』慶長5年7月21日条には「乱世」、同月23日条には「乱世之刻」(『北野社家日記』第5〈史料纂集〉、続群書類従完成会、1973年、279、289頁)、『義演准后日記』慶長5年9月9日条には「不慮天下大乱」、同月19日条には「建武・應仁ノ大兵乱モ是ニハ不可及歟」、同月26日条には「今度ノ大乱昔ニモ未聞」(『義演准后日記』第2〈史料纂集〉、続群書類従完成会、1984年、216、218、219頁)と記されている。

これらの記載によれば、不慮の天下大乱であり、南北朝の動乱・応仁の乱以上の大兵乱であり、今回の大乱は昔にも聞いたことがない、という認識であったことがわかる。こうした同時代人の認識を考慮して、慶長5年9月15日の関ヶ原の戦い(本戦)に至る、同年の日本国内の争乱状態について、慶長という元号を付して、「慶長庚子の大乱」、或いは「慶長庚子の大兵乱」と呼称することを提唱したい。

- (2) 参謀本部編纂『日本戦史 関原役(附表・附図)』(日本戦史編纂委員撰、版權所有参謀本部、長尾景弼印刷兼発売者・博聞社印刷兼発売所、1894年〔明治27年〕、再版。初版は同書の奥付によると1893年〔明治26年〕)。
- (3) 拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実—脚色された天下分け目の戦い』(宮帯出版社、2014年)。
- (4) 高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』(私家版、2015年)。
- (5) 桐野作人『関ヶ原 島津退き口—敵中突破三〇〇里』(学研パブリッシング、2010年)。同書は、その後、加筆・修正し文庫化されて、桐野作人『関ヶ原 島津退き口—敵中突破三〇〇里』〈学研M文庫〉(学研パブリッシング、2013年)として刊行された。
- (6) 前掲註(2)に同じ。
- (7) 前掲・桐野作人『関ヶ原 島津退き口—敵中突破三〇〇里』(117頁)では「近世の合戦絵図や旧参謀本部作成の作戦図などでは、西軍は横一線に布陣しているように描かれているが、そうした見方は修正されなければならないのではないだろうか。」と指摘されている。
- (8) 乃至政彦『戦国の陣形』(講談社、2016年)。
- (9) 「関ヶ原笹尾山交流館スタッフブログ」(<http://sekigahara2013.blog.fc2.com>)の2015年3月26日付「小関地区の陣跡—薩摩池と史料をめぐって7」の記事より引用。この点については、すでに前掲・高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』で紹介されている。
- (10) 『鹿児島県史料・旧記雑録後編三』(鹿児島県、1983年)の巻五十一、五十二(621～718頁)に関ヶ原の戦いに参戦した島津家家臣の関係史料が収載されている。
- (11) 前掲註(5)に同じ。
- (12) 前掲註(4)に同じ。

- (13) 拙稿「関ヶ原の戦いについての高橋陽介氏の新説を検証する－高橋陽介氏の著書『一次史料にみる関ヶ原の戦い』を拝読して－」（『史学論叢』46号、別府大学史学研究会、2016年）。
- (14) 『新納忠元勲功記』（前掲『鹿児島県史料・旧記雑録後編三』、No. 1399、672～683頁）については、①新納忠元は慶長5年の時点で75才であり、関ヶ原の戦いには参戦していない（国許にいた）、②よって、『新納忠元勲功記』は、関ヶ原の戦いに参戦した回想録ではない、③『新納忠元勲功記』には「東軍」の記載があり（676頁、677頁）、軍記物に「東軍」の記載があらわれる元禄期以降の成立と考えられる、という理由から検討対象からは除外する。※本稿では島津家家臣史料以外の史料についても現代語訳して示すこととする。
- (15) No. は前掲『鹿児島県史料・旧記雑録後編三』における史料番号を示し、（ ）内の頁数は前掲『鹿児島県史料・旧記雑録後編三』における該当箇所の頁数を示す。以下も同様である。なお、本稿の次章「2. 島津家家臣史料からわかること」以降では、史料提示をする際にはこの史料番号により示すこととする。
- (16) ただし、No. 1330、1332では「上の山」としているが、小早川秀秋が高い位置の布陣場所から攻め下って、大谷吉継の陣を壊滅させたことを考慮すると、小早川秀秋の布陣位置と大谷吉継の布陣位置は山上と山下という離れた位置関係であったのではなく、岡とその下という一定程度の近い距離の位置関係であったと考えた方が整合的に理解できる。
- (17) 福田誠「【詳解】戦国八陣」（『歴史群像アーカイブvol.6 戦国合戦入門』、学習研究社、2008年）。
- (18) 前掲註（4）に同じ。
- (19) 前掲註（8）に同じ。
- (20) 前掲註（8）に同じ。
- (21) 「一時^{いっとき}」について、『日本国語大辞典（第二版）』1巻（小学館、2000年、1195頁）では「今のおおよそ二時間。一刻。」という意味が記されている。
- (22) 「一時^{いっとき}」について、『大辞泉（第二版）』上巻（小学館、2012年、235頁）では「わずかな時間」、前掲『日本国語大辞典（第二版）』1巻（1195頁）では「短い時間」、「ちょっとの間」という意味が記されている。
- (23) 「吉川広家自筆書状案（慶長五年九月十七日）」（『吉川家文書之二』〈大日本古文書〉、東京帝国大学編纂・発行、1926年、913号文書）。
- (24) 「極月十三日付坪内定次宛生駒利豊書状」（生駒陸彦・松浦武編『生駒家戦国史料集－尾張時代の織田信長・信雄父子を支えた一家』、松浦武氏発行の自家版、秀文社印刷、1993年、所収）。この書状内容については、前掲・拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』を参照されたい。
- (25) 前掲註（23）に同じ。
- (26) 前掲註（24）に同じ。
- (27) 前掲註（8）に同じ。
- (28) No. 1330。
- (29) No. 1340。
- (30) 『新修福岡市史』資料編、近世1（福岡市、2011年、302号文書〔170頁〕）。

(31) 関ヶ原の戦い直後の一次史料における「関ヶ原」の用例については、「(慶長5年)9月17日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状写」(『新修福岡市史』資料編、中世1、福岡市、2010年、5号文書〔177～178頁〕)における「関ヶ原」、「(慶長5年)9月19日付大関資増宛浅野長政書状写」(新井敦史「東国版関ヶ原合戦に関わる黒羽城主大関氏発給文書等について」、『那須文化研究』18号、那須文化研究会、2004年、89～90頁)における「関ヶ原表」、「(慶長5年)9月24日付小早川秀秋宛徳川家康書状」(前掲『新修福岡市史』資料編、近世1、303号文書〔170頁〕)における「関ヶ原」の用例がある。このように、関ヶ原の戦い(9月15日)の2日後、4日後、9日後の書状において「関ヶ原」の用例が見られることは、「関ヶ原」も戦場であったことを示すものと言えよう。

なお、「(慶長5年)9月20日付近衛信尹宛近衛前久書状」(『史徴墨寶考證』第二編、第三卷、帝国大学編年史編纂掛蔵版、1889年、2～3丁)では、合戦の場所について「青野ヶ原」と記されているが、これは誤りである。近衛前久書状の場合、近衛前久がその場で合戦を目撃したのではなく、第三者からの伝聞情報であったため、こうした誤りが生じたのであろう。ちなみに、「(慶長5年)8月27日付寺村重次・山内一吉宛山内一豊書状写」(『山内家史料第一代一豊公紀』、山内神社宝物資料館、1980年、371頁)では、「垂井・関ヶ原まで焼き払い、赤坂・青野原に陣取った」と記されていて、当時、「関ヶ原」と「青野原」は別々の場所であると認識されていた。

(32) 徳川義宣『新修徳川家康文書の研究』(財団法人徳川黎明会、1983年、294頁)。

【付記】

本稿の成稿後、高橋陽介氏は、同氏のブログ(mixi)において、『鹿児島県史料・旧記雑録拾遺記録所史料一』(鹿児島県、2012年、68頁)に「大谷刑部少輔殿一所に 御陣取被成候、然に筑前中納言一揆被起 内府様方に被差出之由、九月十四日に大柿江相知れ申候事」という記載があり、その解釈として、「小早川秀秋が徳川家康に内通し松尾山を占拠する前、九月十四日の時点で、大谷と島津は同じ場所に居たとある。島津が九月十四日に山中にいたとは考えられないから、やはり、大谷は九月十四日に大垣にいたのだらう。」と指摘した。

この史料解釈について、筆者(白峰)としては、高橋氏の上記の指摘とは異なり、「大谷吉継は小早川秀秋と共に(当初は)陣取りをしたが、(その後)小早川秀秋が家康に同心したことが明らかになり、そのことが9月14日に大垣城へ伝わった。」と解釈している。よって、この史料の記載内容は、大谷吉継が大垣城へ入城したことを示すものではなく、当初(小早川秀秋の裏切りが明らかになる前)、大谷吉継が小早川秀秋と共に陣取りをしたことを示すものである、と考えている。

図1 関ヶ原の戦い (山中の戦い) 概要図

